

1930年代南アフリカ共和国における異人種間接触

—— インド人女性団体JIEWAを例に

上 窪 一 世

Social Contact between White Women and Indian Women in South Africa in 1930s : A Case Study of JIEWA

KAMIKUBO Kazuyo

〈はじめに〉

1930年代は南アフリカ共和国（以下南ア）においてインド本国の後押しもあり、エリート
のインド系男性を中心に南インド人社会の政治活動が活発になり始めた時期である。活
動の目的は白人にインド系の実状を理解してもらうことであり、そのために様々な形で白人
との接触を図ろうとした。こうした活動において政治的には沈黙の存在とされたインド人女
性も例外ではない¹。

また、この時期は南ア社会全体で言えば、アパルトヘイトが制度として整備される以前の時
期であるが、徐々に様々な政策面で分離思想が形成、実行されていた時期でもある。そうし
た分離、分断が進む状況のなかであって、コミュニティ間では何が起きていたのだろうか。

本稿ではユマ [1991] 論文²を参考にインド系女性団体「ヨハネスブルグ印欧女性協会
(JIEWA, the Johannesburg Indo-European Women's Association)」の検証を通じて当時の
インド人女性と白人女性の関係を例にこの時期の社会的分断と接触の拮抗状態を考察したい。

以下ではまず、インド人の南アでの社会的な位置づけを把握するために南アへの流入の歴

¹ 当時は南アにおいてインド人女性に限らず女性全般の政治的地位、処遇は低かった。女性に参政権が認められたのは、1936年にアフリカ人男性からの参政権を奪うことを真の目的にそれとの表面的な引き換えとして白人女性に与えられたのが初めてであった。

² Uma Mesthrie (1991), "From Rose Day shows to social welfare : white and Indian women in joint co-operation in the 1930s" (paper presented at the 'Women and Gender in Southern Africa' conference, University of Natal). ユマによるとインド人女性側の記録は少なく、JIEWAはそのなかでも比較的記録が残されている団体であると指摘している。

史を振り返った後でJIEWAの活動について検証していく。

〈インド人の処遇〉³

：流入の経緯

ここではインド人が南アに流入し始める19世紀からのインド人の歴史を簡単におさえておく。

今も多くのインド系住民が住むナタール地域は1843年にイギリスの植民地となった⁴。イギリスから1849年から51年にかけて冒険家ジョゼフ・バーンが始めた計画により男女、子供合わせて5000人が到着したが、多くが中産階級であり、小額の資本提供と引き換えにナタールまで移送してもらい、20エーカーの土地を所有できた。しかし、農民としてはほとんどが成功せず、イギリスへ帰国するものもいたが1870年までにはナタールの白人人口18000人中、イギリス人入植民は15000人、アフリカーナーが3000人という比率に達していた。

このように入植民の多くが農民として成功できず、また、植民地政府の官吏であったシェプストンの対アフリカ人政策⁵により安価な労働力を入手することが困難となっていたことに不満を募らせていた。特に地主達は労働力が不足していた。また、海岸の亜熱帯地方が砂糖生産に適しているにもかかわらず、必要とされる労働にアフリカ人を呼び込むのは難しいことも認識しつつあった。そこで農園主らは植民地政府を説得してロケーション⁶を解体してアフリカ人労働力を解放しようとしたものの失敗に終わった。この失敗がイギリス領インドへと目を向けさせた。インドは当時1833年の奴隷解放によって生じた労働力不足を補うためモーリシャスとイギリス領西インド諸島へ労働力を輸出していたためである。

こうしてインド、ナタールの両政府の取り決めのもと、1860年からインド人がナタールに流入し始めた。この60年から1866年までの6年間に6000人のインド人がマドラス、コル

³ レナード・トンプソン (1998)『新版 南アフリカの歴史』明石書店、187-192ページ。

⁴ ナタール地域はアパルトヘイト体制下ではナタール州と呼ばれ、1994年以降、新政権下での行政区分ではクワズールー・ナタール州となっている。

⁵ シェプストン (Shepstone, Theophilus) はアフリカ人住民の管理を行っていた植民地行政の官吏である。ケープ植民地の東部フロンティア地域でメソジスト派宣教師の息子として生まれた。彼はイギリス政府が後に熱帯アフリカの植民地に用いた間接統治法と類似の手法を用いていた。この手法の要はアフリカ人首長を従属的な官吏とし植民地政府に対して責任を負うというものだった。また、二重の法制度を適用し、アフリカ人にはシェプストンが編纂したアフリカ人慣習を適用し、白人、白人とアフリカ人の関係にはケープ植民地にならったローマ・オランダ法を適用した。トンプソン [1998: 188]

⁶ ナタール植民地政府はアフリカ人を居留地 (ロケーションと呼んでいた) に収容した。1864年までに植民地の全面積1250万エーカー中217万5000エーカー (200万エーカーは42のロケーション、17万5000エーカーは21の伝道団の居留地) がこれに充てられた。しかし、実態は少なくともアフリカ人の半分が居留地には住まず、王領か白人所有地に住み、白人に地代を払っていた。[1998: 187-8]

カタ（カルカット）から到来した。彼らの契約期間は5年間で、契約期間後は雇用主から離れ自由に仕事を選択できた。さらにもう5年、つまり通算10年の滞在を過ぎるとインドへ帰国することもできた。また、ナタールに小さいながら土地を譲渡される権利も得られた⁷。

このような条件のもと、最初に流入したインド人がインドへ帰国できる資格が整った1870年にはほぼ全てのインド人がナタール滞在を選択した。このインド人の年季労働制度は1911年まで続いたが、これが前例となりナタールは多くのインド人が住む南アでも3番目に大きなコミュニティが誕生することとなった。やがて、ナタールのインド人人口は白人人口を凌ぐものとなった。

：諸政策に見るインド人への社会的認識

このようにナタールへの流入と定着が進んだインド人であるが、社会的にはどのように受けとめられていたのだろうか。ここでは彼・彼女達の社会的位置について政策に関わる者達が誰を「われわれ」とみなし、誰を「他者」とするのかという認識が反映される移民政策や人的区分に関わる政策を中心に考えてみる。

1897年、ナタール（当時イギリス植民地）において「移民規制法」が成立した。この法律は、南アへの移民希望者に「ヨーロッパ語」の読み書き能力を問うことで移民を規制しようという意図があった。1902年にはケープ（当時イギリス植民地）でも「移民制限法」が成立した。この法律では、移民希望者に教育程度を計る試験を行い、経済能力を見ると同時に、申請書類に「ヨーロッパ語」の文字で記入し、署名できる能力を備えていることが条件となっていた。先のナタールでの規制法と共に「言語」を指標とするこれらの法律は、インド人の流入を阻止することが目的であった。

1913年には連邦全体に「移民規制法」が施行されたがナタール、ケープでの地域的な規制法とは違い、この法律では「経済上の理由、風俗習慣上の違いから不適当であると判断された者」は、流入を禁ずるとあった。つまり、南ア社会に適応可能かどうかという選択する側の恣意性が極めて高く、しかも曖昧な指標によって規制されることとなった。この「同化可能性」の指標にもとづく規制は、20年代、30年代の諸規制法に適用されている。そのひとつが、1937年の「外国人法」⁸である。それまでの出身地による移民の制限から「同化可能性」を移民の条件にし、イギリスと南ア生まれ以外の移民希望者は、移民選考委員会にかけるという形式だった。

移民法ではなく、すでに南アに居住している人々に対しても同時期、「同化可能性」を指標にした法律が成立している。1924年の「階級別地域法」では、「原住民以外で人種的に共

⁷ 法律によりナタールへ来るインド人男性100人あたりに少なくとも25人の女性が随行することが定められており、定住化への要素は当初から含まれていた。トンプソン [1998 : 191]

⁸ この規制法は、1930年に成立した「移民割当て法」で妨ぐことのできなかったユダヤ人流入を阻止すべく再度、ユダヤ人移民への規制を意図した法律だといわれている。

通性を持つ人々のために都市での居住、商業地を確保する」という内容だった。この法律は都市を白人専用地域とし、インド人の排除を意図していた。

このようにインド人は南アにおいて排除すべき存在として受けとめられていた。

〈JIEWA 結成の経緯〉

：政治的な変化——インド政府の介入とエージェント

以上のような移民政策をはじめとする国内外の政策に象徴されるように、政府は国内外で人の移動・流入に対して規制を強めていった。そして、インド人はこうした規制の対象となる集団として捉えられていた。そうしたなかインド政府の介入もあってそれまでの南アにおけるインド人の冷遇に対して改善を求める声が出てきた。転換となる動きとしては1927年、インド政府と南ア政府との間に取り決めが行われたことがある⁹。その取り決めとはインド政府は移民政策に協力することで南ア政府が南ア在住のインド人人口を縮小させるのを手助けするというものであった。この移民政策では南ア在住のインド人はインド本国へ自由に行き来できるかわりに居住権を放棄するということだった。代わりに南ア政府は南アに残ることを選んだインド人は教育や住居について特に改善された状態になるだろうと認識していた。

こうした協定を見守りつつ両政府間の間を取り持ち、南ア在住のインド人の政治的に無力な状態を改善するための任を負わされたのがインド人代理人¹⁰である。初代代理人のサスツリ (V.S.Srinivasa Sastri) (在1927-29) は、本来の目的であるインド人の待遇改善の一環としてインド人自らをたきつけて社会福祉に乗り出していった。その成果が1927年のダーバンに設置された「社会奉仕委員会 (Social Service Committee)」である。その他にこの委員会との協働で「ダーバンインド人子供福祉協会 (the Durban Indian Child Welfare Society)」も設立された。

このようなインド人の社会福祉分野における改善と共に、1930年代において代理人が担っていた重要な任務に大衆にむけた公的な話し合いの場を設定していくということがあった。代理人は、白人とインド人間の社会的な接触が増えれば両者の関係も改善され、ひいてはインド人の待遇改善に繋がるという前提のもとインド人に対して親和的な白人を増やすべくインド人エリートを巻き込んで奔走した¹¹。とりわけ第3代代理人、クンワール・マハラジ・

⁹ この27年の取り決めから46年頃の時期はインド本国政府が南アのインド人をめぐって南ア政府へと介入してくる時期である。

¹⁰ 代理人 (Agent) という名称は後に総代理人 (Agent-General)、高等弁務官 (High Commissioner) へと変更される。初代代理人はサスツリ (V.S.Srinivasa Sastri) (在1927-29)。

¹¹ 「ナタールインド人会議 (NIC : the Natal Indian Congress) や「トランスヴァールインド人会議 (TIC : the Transvaal Indian Congress)」の政治家や富裕なインド人らに協力を要請した。

シン（Kunwar Maharaj Singh、在1932-35）はこの任務に熱心に取り組んだ。1932年の10月から1933年12月の間に40もの交流の場を設けたことにそれは現れている。そして、こうした話し合いは一過性のものではなく「共同協議会運動（Joint-Council Movement）」という形で展開されていった¹²。1928年にはダーバンとヨハネスブルグに1930年にはピーターマリッツバーグに「印欧協議会（Indo-European Council）」が、設立された¹³。

：シン夫人の尽力

こうしたインド人と白人との関係をめぐる動きを背景に1933年、JIEWAが設立された。設立にあたっては上述した第3代代理人、クンワール・マハラジ・シン（Kunwar Maharaj Singh、在1932-35）の妻クンワラニ・マハラジ・シン（Kunwarani Maharaji Singh）の尽力が大きかった。シン夫人はインドとロンドンにて大学教育を修めたあと、歴史と文学を教える傍らインド本国にて女性運動や福祉活動に関心を持ち、大学女性運動（the University Women's movement）を組織化する際に主導的な役割を果たした¹⁴。また1920年代に「全インド女性協会（The All India Women's Association）」が発足したときからシン夫人はこの組織の教育分野や世論形成、若年期での婚姻の反対といった活動を熟知していた。

彼女は夫とは別にインド人、白人女性に向けて講話、対話を続けていったが¹⁵、その内容は主にインド人が奪われている権利——政治的権利、不十分な教育、総じてお粗末な諸制度——についてであった。こうした内容と共に白人女性とインド人女性の相互理解を深める必要性についても説いて回った。インド人女性達に対してはインド人社会内部での言語や宗教による分断化された関係を越えた関係を築くことを説き、教育や保健分野での活動の必要性を訴えた。また、シン夫人の存在は白人社会にも好意的に受けとめられ当時、*The Cape Times* 紙には「鋭敏な感覚と大変快活な振る舞いのある素晴らしい話し手」と評された¹⁶。

こうした彼女自身の尽力の結果、全国各地に「インド人女性協会（Indian Women's Association）」や「印欧協会（Indo-European Association）」が結成され¹⁷、そのなかのひとつがJIEWAであった。

JIEWAはシン夫人がインド人、白人両コミュニティ間の相互交流と理解を深めることを目的にインド人女性と白人女性による組織を作ってはどうかという提案に端を発している。

¹² この運動で人種間の関係とアフリカ人の福祉の改善を目指すアフリカ人と白人との協会が1921年に結成された。インド人の場合もこれに倣った。

¹³ アフリカ人と白人との同様の協会は1936年までに40余りあり、カラードと白人の協会が数個あったことに比べるとインド人と白人の協会の数は多いとはいえない。Uma [1991 : 8]

¹⁴ Uma [1991 : 11]

¹⁵ 講話した白人女性の組織には次のような団体があった：Bachelor Girls Club（在ダーバン）、the National Council of Women（NCW）、the Association of University Womenのダーバン支部。Uma [1991 : 11]

¹⁶ Uma [1991 : 12]

¹⁷ 結成された都市は次の通り：ダーバン、ピーターマリッツバーグ、ヨハネスブルグ、プレトリア、キンバリー、ポート・エリザベス、イースト・ロンドン。

1933年1月25日の準備会合を経て同年、設立された。設立準備にあたっては共同協議会運動のメンバー、なかでも「ヨハネスブルグ印欧協議会 (Johannesburg Indo-European Council)」のメンバーにシン夫人が助力を求めた。シン夫人と数名の白人女性がエラスムス・エリス夫人 (Dr. and Mrs. Erasmus Ellis) 宅で初の会合を開いたが、どの女性に声をかけるかをリストアップした上でそれらの女性たちを招いて2月9日に会合を開いた。会員はインド人女性16名、白人女性14名、インド人と結婚した白人女性2名という構成であった¹⁸。このような経緯から自主的、偶発的な人の出会いで生まれた組織というより、シン夫人を中心に白人女性の協力のもとで計画的に結成された組織であった。

会員のうち白人女性には後にシン夫人の後をついで代表となったアグネス・ホーニル (Mrs. A.W. Hoernle)¹⁹をはじめとする、夫が共同協議会運動に関わっている女性達²⁰や既に他の組織で活動してきた女性達²¹、医者や教師、福祉関係の仕事をしている専門職の仕事を持つ女性達²²などがいた。さらには会員ではないが、Star紙を代表してロスクゲル (Mrs. Rothkugel) が定期的に会合に参加し、会の活動について掲載していた。

一方、インド人女性の会員には裕福なムスリムの商人やトランスヴァールに不動産を所有するような人々の妻や娘達がいた²³。他にもタミル人、ヒンズー教徒、キリスト教徒の女性達もいたが、彼女達の夫や父親は小規模ながら商売を行っていたり、ホワイトカラーであったりと彼女達も階層的には裕福であった²⁴。また「トランスヴァールインド女性協会 (TIWA)」の会員であるナイドゥ (Mrs. P.K.Naidoo) やパンディター (Mrs. Pandithar) も会員であり、時折、プレトリアインド女性協会の会員から代表が参加することもあった。他

¹⁸ 会員数は2年後には55名に達した。1936年に62名に達したがこれ以上の会員数になったことはないという。また、月例会議への平均出席率はこの会員数の半数よりやや下回る数であったという。Uma [1991: 13]

¹⁹ 夫はR.F.Alfred Hoernle。アグネスと同じヴィットウォータース大学の哲学の教授であり、1934年から1943年まで「南アフリカ人種関係研究所 (SAIRR)」の所長を務めた。また、共同協議会運動にも関わっていた。

²⁰ エリス夫人 (Mrs. Ellis), ピン (Miss Pim), テイラー夫人 (Mrs. Dexter Talor), パルマー夫人 (Mrs. Palmer), クーパー夫人 (Mrs. I.Kuper), ベネット夫人 (Mrs. Bennett) などがいた。Uma [1991: 13]

²¹ 1909年から1913年にかけてトランスヴァールでの抵抗運動の際にトランスヴァール・インド女性協会 (TIWA) に助力したフォーゲル夫人 (Mrs. Vogel) やJIEWAだけでなくプレトリアインド女性協会でも中心的な役割を果たした ラクストン夫人 (Mrs. Laura Ruxton) らがいた。Uma [1991: 13]

²² ロバートソン博士 (Dr. Janet Robertson), レイド博士 (Dr. Marion Reid), サッシュ博士 (Dr. Sophie Sash), ブッカー博士 (Dr. C.J.Booker), カーリスル博士 (Dr. Carlisle), カッツ (Miss E. Katz), グレインガー (Miss Grainger), カプラン (Miss Kaplan)。Uma [1991: 13]

²³ アダム夫人 (Mrs. Cassim Adam), クーヴァディア夫人 (Mrs. E. Coovadia), クーヴァディア (Miss A.Coovadia), ガーディー夫人 (Mrs. Gardee)。Uma [1991: 13]

²⁴ シン夫人 (Mrs. R. Singh), フランシス (Miss Band K.Francis), フランク夫人 (Mrs. E. Frank), ロイッペン夫人 (Mrs. S.W.Royeppen), ピラー夫人 (Mrs. Morgan Pillay), カンタック夫人 (Mrs. F. E. Kanthack), アーネスト夫人 (Mrs. W.Ernest), チェットティ (Miss B.Chetty)。

にもインド人の夫を持つ白人女性達²⁵もあり、積極的に関わっていた²⁶。

参加者の経歴を見ると白人会員には自らが専門職で働いている者もいるという点では違いがあるものの経済状態に大差はなく、それぞれのコミュニティにおける階層という点でもエリート集団であり、経済状態と社会階層という点では均質な集団であったといえる。

〈活動内容の推移〉

：内向きの交流

最初の頃の活動は外に向けたものというよりまず、会員間の交流に主眼が置かれていた。白人会員がインド人会員宅に招かれたり、会合も個人宅で行われていた。会合の取りまとめ役であったエリス夫人 (Mrs. Ellis) によれば根底にある目的とは友人となり、互いをよりよく理解することであったという²⁷。そうしたことを反映してか談笑、ゲーム、音楽を皆で楽しむといったことを行っていた。またインド人会員のハファジ夫人 (Mrs. Haffajee) から、英語や刺繍を習いたい若いインド人ムスリム女性がおり、英語の先生が必要だとの話から、インド人女性が英語を習うことを手助けするようにという提案もなされた。さらにはエリスはインド人会員にまだ会員となっていない他のインド人女性達にバーダー (イスラム教国で女性を人目から隠すための幕、とばり) を脱ぎ捨て JIEWA に参加するように最善の努力をしてほしいと依頼したりもした²⁸。

こうしたインド人女性と白人女性の交流を重視していた姿勢は事務局のリッチー夫人 (Mrs. Richey) がデビッドソン夫人 (Mrs. Davidson) 宅での会合について述べた次のようなエピソードにも表れている：

それはよく晴れた日でした。親切な主催者は会員のために彼女の素晴らしい庭でテニス、クロケット、バトミントン、テニコイ をするように手配してくれていました。20名のインド人会員がやって来て庭や競技にどっぷりとはまっていました。クロケットやバトミントンが人気がある一方で若い会員のなかにはテニスに見込みのあるスタートを切ったものもありました。打ち続けているのがまったく退屈ではありませんでした。私は我々はみな気づいていたと思います。天気の良いなか野外でのパーティーはとりわけインド人会員にとって喜ばしいものだ。というのも彼女達のほとんどが庭を持っていないので²⁹。

²⁵ キャサリン・ゴッドフリー (Catherine Godfrey : 夫は Dr. W. Godfrey), エレン・ナースー (Ellen Nursoo : 夫は D.M. Nursoo。彼自身はヨハネスブルグの裁判所とインドエージェントで通訳として働いていた)。

²⁶ 設立の経緯がシン夫人を主導とする言わば「上からの声かけ」で始まっていることもあり、最終的に参加した会員の参加動機や理由、活動への意欲などは不明であり、今後の調査課題である。

²⁷ Uma [1991 : 14]

²⁸ *ibid.*

²⁹ *ibid.*

また、クーパー夫人宅 (Mrs. Kuper) である寒い冬の日に行われた会合でのエピソードでは；

大きな炎が全ての部屋に赤々と燃えていました。ほとんどの人が火の傍に座って話すことを好みました。ピアノ (自動ピアノ) の奏でる音楽が流れ、南アフリカ議会の開会でのキングの演説に聞き入ろうとしました。

と述べられ、努めて打ち解けた雰囲気作りをしていたことが感じられる。こうした雰囲気作りもあってか会員達は個人的にもパーティーを開いたり、フォーゲル夫人 (Mrs. Vogel) のように女の子達に刺繍を教え始めたりといったことも行われるようになった。

このようないわば個人レベルでの相互理解を目的とした活動とは別に熱心に取り組んでいたのがヨハネスブルク市庁が取り仕切る「ローズデイ (Rose Day)」の祝賀祭だった。インド的な山車を出す許可を市庁から得て、数ヶ月にわたる準備を行う程だった。このローズデイ当日についてJIEWAの事務局は次のように述べている；

当協会はカレンバッシュ氏 (Mr. Kallenbach) によるタージマハルをモデルにワゴンを飾り付けしました。装飾された車を引き連れてこの展示はもっともうまくいったものであり、インド人女性達に非常に満足感を沸き起こらせました³⁰。

個人レベルでの交流とは違う、インド人としての誇りを満足させてくれるこの行事への参加は、年間の定例参加行事のひとつとなっていた。

：方向性の変化

JIEWAの活動としてはローズデイ祭への参加のような集団としての行事もあったが、個人間での娯楽的な活動を仲立ちにした相互理解を主眼とする活動から少しずつ変化し始めるようになった。そのきっかけとなったのが、アグネス・ホーンル夫人 (Mrs. A.W.Hoernle) である。

シン夫人自身も会員達に社会問題へ目をむけるように追い立てる立場にあったが、1934年にホーンルが代表になってから協会の活動を大きく後押ししてきた。彼女自身は南アの社会人類学の母と呼ばれる人物であり、JIEWAに関わるようになった頃はヴィットウォーターズラント大学のバンツ研究科で講師をしていた。夫のアルフレッド (R.F.Alfred Hoernle) も同大学の哲学の教授であり、「南アフリカ人種問題研究所 (SAIRR)」の所長 (1934-43) を務めていた。アグネスは社会問題に関心を持ち、「生活の質を高める」という目的を追求するために1938年には研究職を辞してJIEWAの活動に専念した。その意気込みは会員に向けて放った「この協会は活動をローズ・デイの余興に加えて、社会的な余興だけにとどめる

³⁰ Uma [1991 : 15]

のではなく、他の有益な活動も行われるべきです」³¹という発言にも表れている。

こうした社会問題とりわけ社会福祉の問題にヨハネス地域に住むインド人女性の様々な組織が関わっていくことはもともとシン夫人自身の願いでもあった。こうした願いは行動へと移され、JIEWAの会員であるフランシス (Miss Francis)、クーパー夫人 (Mrs. Kuper)、アーネスト夫人 (Mrs. Ernest)、ラクストン夫人 (Mrs. Ruxton)、シン夫人 (Mrs. Singh)らによりヨハネスブルグ在住のインド人の貧困調査が行われ、結果報告はSAIRRにも提出された。この調査報告はとりわけタミール系インド人の貧困についての詳細な実態をつきとめるものとなっていた。こうした調査がもとになり、1934年6月には「ヨハネスブルグインド社会福祉協会 (Johannesburg Indian Social Welfare Association, JISWA)」の結成にも結びついた。JISWAの結成にあたってはJIEWAは勿論のこと、SAIRR、TIWA、印欧協議会、「トランスヴァールインド人商工会 (TICA: Transvaal Indian Commercial Association)」³²の各代表が集まり会合を開いて結成に至った³³。

JIEWAとJISWAの関係はJIEWAがJISWAを「わが子」と称したことからも結びつきの強さが分かる。実際、互いが協力して幾つかのプロジェクトを遂行した。そのひとつが貧困家庭への支援であり、JISWA自身は社会福祉士のカツ (Miss E.Katz) に命じて「ラント支援協会 (Rand Aid Society)」からの支援を受けるに値する家族の特定作業を行った。さらにヨハネスブルグ在住のインド人から寄付を募り、カツ自らが運転して一軒一軒の家族に寄付を手渡して回った。JIEWA側は支援協会からの援助をもらえない家族への援助をカツが行えるように資金を調達して支えた。

またフォーズバーグに開いたクリニックにはJIEWAの会員でもある医者達が無料で治療にあたった。このクリニックは行政とも連携して乳児用のクリニック設立にも関わった。JIEWAの会員のなかにはこのクリニックの活動を支援するため定期的に通う者もいた。JISWAもまた子供のための福祉委員会を結成し、「児童支援協会 (Children's Aid Society)」と提携し、その繋がりから「児童福祉全国協議会 (The National Council of Child Welfare)」とも提携することとなった。

この他にもJIEWAはインド人女子のために共学の学校を行政との協力で開校したり、高齢インド人への年金の適用のために行政にかけあったり、貧しい人への食料、衣料援助を行ったりと様々な活動した。こうした福祉活動以外にも特に西洋的なものを吸収したがっている若いインド人女性に向けた活動も行った。それらは「ジュニアクラブ」という形で展開

³¹ Uma [1991: 16]

³² ヨハネスブルグ在住の有望なインド人商人や不動産所有者からなる組織。

³³ JISWAの幹部にはJIEWAからフランシス (Miss Francis)、クーパー夫人 (Mrs. Kuper)、シン夫人 (Mrs. Singh) がSAIRRからサフリー (A.L.Saffery)、ラインホルト (J.D.Rheinhardt) が、ビジネス関係からミア (M.Mia)、ガルディ (Gardee)、アダム (Cassim Adam)、アシャバイ (Asherbhai)、クーヴァディア (Coovadia) 氏ら商人がいた。

していったが、アメリカでの同様の活動に携わった女性達の助言と支援を受けて設置されたものだった。活動内容には会議の進め方からお茶の入れ方、テーブルセッティングまであり、これらの活動はJIEWAの白人会員の支援を受けて進められた。

こうした活動において快く思わないインド人男性の妨害やインド人女性自身の自己制限もあり、必ずしもインド人女性の参加はスムーズではなかったが、このように福祉活動へもJIEWAの活動は展開されていった。

：組織内の力学

総じてシン夫人の尽力、鼓舞で次々とできた相互交流の組織は、様々な人種、文化背景を持つ女性達を集わせ、社会的に意義のある活動と同様に互いをもてなし、情報を交換するという方向性に向かって協働していた。さらにどの組織も専門性の高い職業に就いている白人女性の支援によって担保されており、こうした傾向もあってかJIEWAの場合、組織内の力関係は不均衡であった。ユマ [1991 : 21] はそうした不均衡さが単なる幹部に占めるインド人女性の数というようなことではなく、西洋が最善であり白人女性はインド人女性を助ける必要があるという考えに起因していると述べている³⁴。代表のホーンルはインド人女性達に対して会合で発言することを求め、JIEWAがどのように彼女達にとって有益で価値あるものかを発言するようになどと提案していた。こうした発言は上述した力関係を裏付けていよう。

また JIEWAの活動についてユマ [1991 : 22] は30年代というインド人のなかで政治への意識が目覚め始めた時期にも、スタンスとしては非政治的スタンスを保とうとしていたが、実際はその活動は政治性を帯びていたと指摘する。ひとつにはJIEWAが行政との対立ではなく協力関係のもとで活動していた側面があったことに起因している。市、地区の行政担当者、さらにはその妻達とも関係を築き綿密な形で協働していたからである。こうした協働と表裏一体の依存姿勢は、JISWAを通じて保守的なTICA³⁵に依存するということにも表れていた。また、協力関係の偏りも否めない。白人とインド人との関係が全てにおいて重要であるとの前提から、社会的劣遇ということでは同様の立場にあったアフリカ人女性達とは全く関係を持つとしなかった。一部のトランスヴァールやナタールのラディカル派は第二次世界大戦への参戦において、南アではアフリカ人が抑圧されている以上あらゆる協力に反対するとしてインド人部隊へのリクルートを阻止しようとした。しかし、JIEWAはインド人兵士へ贈り物を捧げ、「南アフリカ慰問委員会 (The South African Gifts and Comforts

³⁴ ユマはまた、長年幹部を務めたインド人女性達もいたが、インド人女性の声が組織の記録からはなはだしく欠落している点も指摘している。Uma [1991 : 21]

³⁵ TICAは戦略としてのボイコット運動に反対し、自らの商業的利益を守るための権利を担保するため政府とは協力関係にあった。

Committee)」の委員長であったスマッツ夫人 (Mrs. J.C.Smuts)³⁶の活動を支援してさえいた。

このように実際は活動が政治性を帯びつつもそこには意識的ではなかったJIEWAの活動は、別の見方をすればユマ [1991] が指摘するように「社会福祉と娯楽活動が白人とインド人が協働できそうな核たるものを提供していた³⁷」ことでそうした政治性に蓋をしていたのである。

〈おわりに〉

以上みてきたJIEWAが活動した時代は1930年代というアパルトヘイトが制度として機能し始める以前の時期である。しかし、既に後の制度としてのアパルトヘイトを支えるような人間関係の分断と格差が存在し始めていた。このような時代のもとJIEWAは様々な問題をインド人と白人という図式のなかで解決を探ろうとした。こうした解決の方向性はJIEWAの根底にあった考え方——西洋が最善であり、白人はインド人を助ける必要がある——に支えられたものだった。このことが同じ社会的劣遇という立場であってもアフリカ人らとの協力関係が築かれていないということに繋がっていた。つまり、ネットワークの対象が同じ立場どうしではなく、社会的に力のある白人との関係をいかに築き、良好にするかという思考である。そこには同じ立場どうしが協力しあい、異議申し立てしていくという方向性は生まれにくい。

このようなJIEWAの活動についてユマ [1991] 自身は次のように評価している。

JIEWAは小人数の会員ではあったが、その活動は多くの人々の生活に影響を及ぼした。この会の強みはローズデイの催しものから社会的な活動へと変化したことである。限界は、抑圧的な制度との正面からの対峙ではなく、修正主義の傾向であったという大半のリベラルな活動の特徴付けていたこのことである³⁸。

ユマは制度への正面からの取り組みがなかったことを「限界」と評価しているがこうした傾向がJIEWAだけでなく、当時の大半の活動の特徴であったという記述には、時代的制約の問題が示唆されている。

こうした時代的制約による思考の「限界」とは別にJIEWAの活動の特徴付けているのはカリスマ的な個人や人的ネットワークの活用といった人的側面である。シン夫人やホーネル夫人といった個人に代表されるようにJIEWAの活動は活動の成り立ちからいっても個人の

³⁶ 1939年から48年まで南アの首相を務めたスマッツの妻。

³⁷ Uma [1991 : 23]

³⁸ Uma [1991 : 29]

リーダーシップや繋がりを最大限に活用し、継続されたところに特徴がある。

このように個人の尽力が発揮されて人的交流の場が辛うじて維持されていたが、それは既に「施す側」と「施される側」という不均衡な力関係の思考に基づくものであった。

(かみくぼ かずよ 本学非常勤講師)